

医療・福祉問題研究会会報

NO. 103
2011.6.25

医療・福祉問題研究会 2011 年度総会記念企画

日時：7月30日（土）

総 会：13時30分～14時30分
記念企画：15時～17時20分

会場：IT ビジネスプラザ武蔵 6F・ホール 2（交流室 2）

（金沢市武蔵町 14-31 076-224-6340）

めいてつエムザ・武蔵スタジオ通り下堤町側エレベーター

テーマ：財政危機・財政改革と社会保障－震災復興財源にも触れて－

講師：梅原英治さん（大阪経済大学経済学部教授）

資料代：500 円

総会記念企画にあたって

いま、社会保障と震災復興の財源をめぐって、増税、とくに消費税の増税が大問題となっています。

税のあり方の根本は公平であることです。公平には「水平的公平」と「垂直的公平」の2つがあります。水平的公平とは、同じ税負担能力（担税力）の者は等しく税を負うべきことで、これは分かりやすい。他方、垂直的公平は、担税力の大きな者は重く税を負うべきことですが、税の累進度はその時々社会のコンセンサスによって異なり、日本では80年代以降累進度が大幅に緩められてきたため、経済格差を拡大する一因となりました。

消費税は水平的公平も垂直的公平も充たせません。まずは2つの公平を徹底追求すべく、担税力ある個人や企業に正当な負担が課せられるよう、所得税や法人税を再建することが税の王道です。社会保障改革においてもこの立場を貫くことが必要です。

復興財源は復興債を基本としつつ、復興需要で一時的に所得を増やす企業や個人もいることから、臨時の法人付加税や所得付加税などを課す方向が正当であり、被災地にもかかる消費税は避けるべきです。

そうはいつでも、実際に賄えるか、資本が海外に逃避しないか、ご心配になられることでしょう。講演の際には簡単なシミュレーションもお示しする予定です。

大阪経済大学経済学部教授（財政学） 梅原英治

『ローカルな「社会保障政策の束」形成の可能性を探る』

金沢大学 森山治

「政策の束」研究会は金沢大学に所属する教員によって組織されている研究会である。社会保障施策の地域的・総合的提供(「政策の束」)に関する国際比較研究として科研費に採択(2007)されている。研究会によれば本研究は、貧困問題のもつ多様な相に着目し、地域における対貧困政策の相互連携、「政策の束」形成の可能性を探ろうとするものとされている。

会員諸氏もご承知のとおり先進国に限らず、新自由主義思想の経済体制下においては世界的な規模で貧困と格差は拡大しており、こうした社会的排除に対する処方箋としてヨーロッパでは社会的包摂によるシステムづくりへの動きがある。

他方我が国をかえりみると、社会的包摂への動きは若干あるものの、国をあげての政策レベルとしての動きは鈍いと言わざるをえない。

「政策の束」研究会による研究は、各国の制度を比較することによる縦軸と、人権・医療・福祉・雇用・障がい者支援といった分野別による横軸からの比較研究をおこなうことで、我が国での社会的包摂を目的とした政策導入の可能性を追求している。

当日は研究会から、以下にあげる3点の報告がなされた。

第一報告「福祉システムの動態と類型：経済と社会の関係」堀林巧さん

報告の総論にあたるものである。福祉システムの動態と類型に関わる論理と歴史を整理しながら、主に先進国の福祉システムの未来を展望し、未来の福祉システムにおける政策の束のフレームワークを示すことが本報告の目的である。

堀林さんはカールポランニー(経済学・経済人類学者)に依拠しつつ、戦後の資本主義社会を分析し、福祉システムの将来として、①脱成長至上主義、②互酬(共助)原理に基づくコミュニティ・アソシエーションから世界共和国への展望へとまとめられている。

第二報告「ドイツにおける政策の束」武田公子さん

武田さんはドイツにおける長期失業者支援に対する政策枠組みの変遷を紹介し、特に2005年以降におこなわれている「ハルツ改革」を中心におこなわれている政策諸手段と問題点について整理・報告された。

第三報告「スウェーデンにおける政策の束」横山壽一さん

横山さんはスウェーデンの経済情勢、雇用対策(過去と現在)、失業・貧困に対する自治体の対応(ソルナ市を例に)を整理・紹介し、スウェーデンの特徴として多様なモデルを試行しながら労働市場への押し戻しを基本とした政策の特徴を指摘している。

かって公共サービスの拡大が女性の社会進出につながったように、労働市場が高付加価値労働にシフトしているなかで、EU(特にスウェーデン)は就業率を上昇させる政策を採用していること。その反面、高付加価値労働にシフトできない移民を大量に抱えたことが財政への負担となり、民族主義の台頭をまねく様子など、外国人労働者が不安定就労層化しつつある我が国の現状に比較して大変興味深い内容であった。

災害支援を通して感じたこと

城北病院 MSW 大平良則

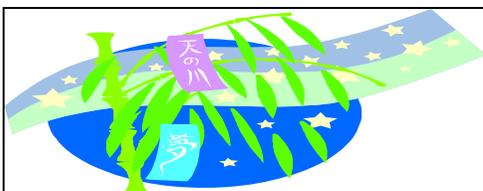
石川民医連の東日本大震災災害支援の部隊として3月19日～27日まで宮城県の坂総合病院に行ってきた。災害支援に行くことを決めたまっかけは、高校2年生のときに中越地震の被害を受け、そこで多くの人に助けられたため、次は自分の番だと思ったからである。

行きの道では災害被害が無いところを通ったが、通行止めや自衛隊の車を多く見かけ、とても衝撃を受けた。約8時間かけて無事に目的地の坂総合病院に着くことができ、やっと一息つけると思ったが、ちょうど4トントラックに積まれた支援物資が届いた。かなり多くの支援物資で驚いたが、人もかなり多く集まり、リレー方式で運ぶことができたため、スムーズに終わった。重い支援物資運んだりして初日から疲れてしまい、すぐに寝てしまった。寝床は会議室を借りて簡単なクッションを敷き、その上に寝袋でみんなと雑魚寝で寝ることができた。私が支援に行ったのが災害から1週間経過していたため電気も復旧しており、暖房により温かい部屋で寝ることができた。十分すぎる環境であったが、避難所で生活している方たちを思うと心苦しさもあった。

2日目からは避難所訪問の事務局で支援することになった。避難所訪問は医師、看護師、事務の1チームが避難所へ行き、そこで身体の不調を訴えている方に診察を行い、薬の処方もする。専門的な治療が必要な方に関しては、坂総合病院につなげることもある。避難所訪問の事務局の支援内容は、避難所へ行く方たちのために簡単なオリエンテーション、訪問に行かれた方たちに避難所の情報収集して次の訪問に必要な物品を用意する、薬の処方の集計をするなどである。明日の準備や薬の集計などで眠いのを我慢しながら毎日夜中の12時近くまで行った。

事務局の仕事が忙しくて外に出る機会がなかったが、半日のみ避難所へ行く機会があった。避難所へ行くと、避難所生活とこれから先の不安によりストレスがたまっているように伺えた。避難所の環境も悪く、掃除を毎日しているらしいが、砂埃がすごかった。他にも、避難所へ行かれた方たちの話では避難所で不審者（泥棒）が出るようになり、怖くて夜も眠れないという声も聞き、心が痛んだ。

1週間の災害支援が終わり、帰りは津波の被害にあった地域を通った。その地域では信号機などが倒れており、また乗用車はもちろん大型バスもつぶれて、横転もしていた。私が見た地域はほんの一部に過ぎないが、相当な被害であった。復興するのに時間がかかるだろうと感じたが、必ず復興できると信じている。ただ信じるだけでなく、他県からでもできる支援をこれからもしていきたい。



懇親会のお知らせ

医療・福祉問題研究会総会記念企画の後は、恒例の懇親会を予定しています。多数のご参加をお待ちしております。

日時： 7月30日（土）17時半頃～

場所： 菜香楼 TEL 076-221-3156

（金沢市武蔵町15-1 めいてつエムザ地下1階）

会費： 約4000円を予定

参加ご希望の方は、7月27日（水）までに下記までご連絡をお願い致します。

E-mail yyhms182@ybb.ne.jp （河野）

